

## 幼稚園・保育所における英語活動の実践（２）

○秀真一郎（吉備国際大学）、志濃原亜美（秋草学園短期大学）、鳥田直哉（東海学園大学）  
小野克志（名古屋文化短期大学）、木本有香（同朋大学）、田中卓也（共栄大学）  
中島眞吾（名古屋短期大学）、横井一之（東海学園大学）

### 1、研究の目的

筆者らは、2012年2月に「幼児の英語活動研究会」を立ち上げ、幼稚園・保育所等における英語活動の動向や実践について様々な立場から調査・研究を行っている。今回は、その続きとして、昨年の日本保育学会（第67回）自主シンポジウム「幼児教育現場における英語教育・英語活動の現状とその方向性」の一部で報告した2013年に行った認可外保育所での実践を非参与観察した調査結果の実践をもとに保育所での英語教育を保育所保育指針の視点から分析することを目的とする。

### 2、方法

**協力園：**S市認定保育園 M インターナショナル保育園（2015年1月現在、同法人グループは、8園の認可保育所、11園の認可外保育所（2つの自治体での認定を受ける認可外保育所）をもつ。このうちインターナショナル園は、1園のみ。）

**観察時期：**2013年11月11日（月）10:00から14:00

天気 曇りのち一時雨

**観察場面：**①3～5歳児の合同サークルタイム(週末の出来事、プロフェッション)②4～5歳児の活動（月・日・曜日・天気、フルーツバスケット《数》）③5歳児の活動（いろいろな車、ワークブック）

**保育者：**担当外国人保育者（ガーナ、ネパール、ロシア出身）〈全外国人保育者 8名（うち正規3名）出身国：ガーナ、カメルーン、ネパール、ロシア、フィリピン（2）、韓国（2）〉

### 3、保育所保育指針における「保育の内容」からみる英語教育

保育所保育指針の保育の内容には、①養護に関わるねらい及び内容（生命の維持、情緒の安定）と②教育に関わるねらい及び内容（健康、人間関係、環境、言葉、表現）がある。保育所は、保育を必要とする乳幼児が生活時間の大半を過ごす場であり、養護と教育が一体となって展開されている。このことを踏まえ、英語活動はどのように展開されるべきであろうか。事例から考察する。

### 4、実践

M インターナショナル保育園では、3歳児以上は担当が外国人保育者、副担当が日本人保育者で構成されており、生活のほとんどが英語という環境である。

#### ①3～5歳児の合同サークルタイムの事例(週末の出来事、プロフェッション)

##### 週末の出来事

外国人保育者「週末、何をしたか(What did you do on last weekend?)」の問いに対し、

子ども「スカイツリーを見に行った、友達と遊んだ、温泉に行った」

外国人保育者：時制の間違いを直す、遊んだなら誰と？などの補足、また、土曜か日曜かななどを聞く

最後に保育者が、「私は日曜日一日中寝ていた」というと笑い声、隣の子にどんな意味かを聞いている姿もあった。

##### プロフェッション〈職業について〉

11月のテーマーショッピング、プロフェッション導入（手作りのカードを用いて）スーパーマーケットや店員、お客さんなど英語で子どもたちが答える。歌やダンスで印象付ける（ショッピングソング、ダンス）

外国人保育者による職業についての質問「将来何になりたいか」（カードを用いて例を挙げる）

子ども「サッカー選手」「警察官」「先生」「宇宙飛行士」

#### ②4～5歳児の活動（月・日・曜日・天気、フルーツバスケット《数》）

今日の月、日、曜日、天気などの質問に対し、子どもたちが答える。明日は？あさっては？など別の日の質問もある。

フルーツバスケットでは、グループに分かれて、フルーツの入ったバスケットを持ち、それぞれどのフルーツが何個入っているかグループで答える。

#### ③5歳児の活動

お昼寝のない5歳児は、小学校就学の準備も兼ねて新しい言葉を覚えたり、ワークブックをしていた。この日は、車の種類をタブレットをみながら答えていた。ワークブックは、アルファベットの書き取り等である。

### 5、まとめ

幼稚園・保育所における英語活動は、契約の外国人講師を招いて、週数回行うパターンが多く、単発的に行っている園がほとんどであるが、協力園においては、生活そのものが英語であり、例えば、壁面にも手洗い、うがいなどのサインがある。そのような面において、保育所保育指針の保育の内容の特に教育に関わるねらい及び内容に合致しているだろう。その中でも、日本以外の国の文化に触れることや自分を表現することは、英語というツールを用いて強調されていると思われる。また、子ども同士で教えあったり、3歳児が4、5歳児に対し憧れる場面も見られた。養護の部分に関しても、すぐそばにいる先生が外国人であり、自然に快適に安定感をもって生活をしている様子があった。全体を通して、養護と教育が一体となった保育を英語活動によって行っていると言える。文部科学省が英語教育を小学校3学年に引き下げることが検討されている現在、幼稚園・保育所でも英語活動のあり方も模索されるだろう。学校教育に続く基盤としても幼児期にどのような英語活動が必要であるかを明らかにしていくことが今後の課題である。

**参考文献：**秀信一郎他（2013）「幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性」『吉備国際大学研究紀要 人文・社会学系第23号』

厚生労働省 保育所保育指針

秀真一郎他（2014）「幼児教育現場における英語教育・英語活動の現状とその方向性」『日本保育学会 第67回大会 発表要旨集』p